東西児童文学碑考

関　英雄

少年時代からの旧友で今も親交のある茶木滋の童謡「めだかの学校」（作曲、中田喜直）の歌碑が、昨秋、彼の故郷の横須賀市の三笠公園通りに建立された。市当局の発意で建てられた大きな御影石の碑で、〝めだかの学校は川の中〟に始まる全歌詞と曲が表面に彫りこまれている。この童謡は一九五二年、ＮＨＫラジオの新作童謡として放送されて以来今も広く幼い子たちに唄われている〝国民歌謡〟といっていいほどポピュラーな謡なので、横須賀市が歌碑を建てたのも道理といえる。

芭蕉の句碑や啄木の歌碑ほか、戦前時代から日本各地に文学碑は多いが、童謡詩人、童話作家など、児童文学者の詩碑、文学碑が各地に建つようになったのは、戦後時代になってからだ。女性と子どもの人権が無視されること久しかった日本で、戦後民主主義時代になって、児童文学がようやく市民権を得るようになったことの反映かもしれない。童謡碑も数多いが私が最初に見たのは、新潟市の海岸公園に建つ北原白秋の大正期の名作童謡「砂山」の碑だった。〝海は荒海向こうは佐渡よ〟に始まる歌詞が赤御影石に浮彫りされていた。昨秋刊行の藤田圭雄著『東京童謡散歩』によると三多摩をふくむ東京都には十一もの童謡碑がある。その大半を私は最近まで知らなかったが、浅草寺境内にある明治の幼年唱歌「鳩ぽっぽ」（滝廉太郎曲）の碑の建ったのも戦後の一九六二年だ。三木露風詞、山田籍作曲のこれも有名な童謡「赤とんぼ」（一九二一年）の碑は露風が仮寓していた東京・三鷹市の三鷹駅近くにある。「赤とんぼ」の碑は露風の郷里兵庫県竜野市にもある。

加藤まさをの、やはり大正期の感傷的な童謡「月の沙漠」（佐々木すぐる曲）の碑は、作者がこの作品の発想を得た千葉県御宿の海岸にあり、これも比較的最近の建立で、建立当時大きく新聞報道された。童話作家の碑では日本のアンデルセンと呼ばれた小川未明の童話「赤いろうそくと人魚」（一九二一年の作品）の碑が未明の故郷の上越市・高田公園に一九八二年秋建立された。坪田譲治の童謡の記念碑は、坪田の故郷岡山市の彼が卒業した石井小学校校庭に、坪田の在命中に郷党の発起で建てられた。建設計画を知った坪田が拒否し

たにもかかわらず除幕式の案内が来たので、やむなく坪田が東京から岡山へ馳せつけたところ、石碑に刻んだ〝譲治〟の文字が、〝譲二〟になっていたとはこの大失輩の作家から私が直接きいたところで、碑はまだ見ていない。花巻市の宮沢賢治の碑も未見だが、新美南吉の代表作「ごん狐」（一九三二年、『赤い鳥』初出）の碑が彼の郷里愛知県半田市の彼が卒業した半田小学校校庭に建ったのは三、四年まえのことだ。除幕式に招かれて私も出席したが、南吉の初稿の肉筆の「権狐」を寫った文学碑であった。南吉の碑はこの以前にも半田を中心とする知多半島にいくつかあり、半田では名物〝南吉饅頭〟まで売られている。半田小学校の碑で残念だったのは、どうして「ごん狐」の主人公の狐を碑にしなかったかということだ。日本の文学碑の多くは作者を讃える文字碑であり、人の碑である。

それに対して私が知る限り、ヨーロッパ諸国の童話碑ないし児童文学碑は、多くの子ども読者に愛された物語の中の主人公を碑にしている。それは、もう十三年前になるが、一九七六年夏、〝ヨーロッパ児童文学散歩〟というツアーに参加して、八ヵ国を廻って実見したところだ。ロンドンのケンジントン公園には、バリの名作「ケンジントン公園のピーターパン」（一九〇四年）の主人公ピーターパンの立像がある。ピーターは永遠に年をとらない子どもの妖精であり、無邪気、正義心、友愛、冒険心を体したイギリスの子どもの理想像である。イタリアのフィレンツェ郊外のピノッキオ公園に立つグレコ作のピノッキオ像はコツロディの空想物語「ピノッキオ」（一八八三年）の主人公で、いたずらっ子でわんぱくだが人にだまされやすく涙もろい木の人形ピノッキオが、経験を積んで生きた人間の子に変身する、イタリアの子どもの理想像だ。

スイスのマイエンフェルトという羊の遊ぶ牧歌的な山村には、湧き出る泉の傍らにスピリの名作「ハイジ」（一八八〇年）の主人公少女ハイジがかがんで泉の水をのぞきこんでいる等身大の石像がある。西ドイツのブレーメンの市庁舎前広場の隅には、グリム兄弟の童話でおなじみの「ブレーメンの音楽隊」の主役たち、ろばの背に犬が乗り、その上に猫が乗り、猫の背に鶏が立ってトキをつくっているユーモラスな像がある。デンマークのコペンハーゲンの埠頭には、おそらく童話碑としては世界に最も広く知られているアンデルセン童話「人魚姫」の人魚姫が哀愁のまなざしで海を見つめている像があり、私の見た時も観光客が争ってこの人魚像にカメラを向けていた。

日本で私が知る限り、作品の主人公を像にしたのは前記上越市の「赤いろうそくと人魚」の人魚像（これはよく出来ている。）と、やはり近年横浜港に臨む山下公園に建った野口雨情の童謡「赤い靴」（一九二一年）の歌詞〝赤い靴はいてた女の子〟のその女の子の像くらいのものだ。短歌、俳句、詩などでは文字碑にするしかないだろうが、物語である童話では、お話の主人公の像であるほうが、少くとも子どもの観客に親しまれること確実だ。

東西の児童文学碑を比べてもう一つ考えることは、日本の碑の多くは地域の碑で、未明の「赤いろうそくと人魚」南吉の「ごんぎつね」の碑、共に郷党の発起で建てられ、その地域ではだれもが知る観光名所だが、全国的には知られていない。アンデルセンの人魚姫の像やピーターパンの像はこの国の国民ならだれもが知っている、上野の西郷さんの銅像みたいなものだ。つまり日本にはまだ国民的なアイドルになり得るような童話の主人公が昔話の桃太郎くらいしか居ないのだ。一口にいえば歴史の遅れである。